

日本人と「富士」

笠原博司*

はじめに

先日、東京駅JR「緑の窓口」での出来事。
新幹線の指定席を予約するのに、執拗に「富士山の見える席」を要望している様子が伺えた。うんざりといった表情の窓口係員から出た言葉は、「富士山は無くなりませんよ！（小声で）もう、いい加減にしてよ」と言うような会話が偶然耳に入ってきた。

そこには、日本人の誰もが感じる心の拠りどころである「富士山」への思い入れが乗客にはあり、車窓から眺め、可能な限り心に留めて置きたい気持ちの現れがあったろうし、窓口係員は列を作っている乗客を捌くことが自分に課せられた仕事であり、「富士山」が見えようが、見えまいがどうでも良いことであって、二者の思い入れの違いを感じたものでした。

1. 富士山の信仰

富士山は有史以来、その秀麗な姿によって、永遠の神の山としての地位を獲得していた。ただ、本当の意味で庶民から霊山として崇められるようになったのは平安時代も終わりのころ、と言われ、室町時代には相当数の登山者が山頂をめざしたようである。

江戸時代中期になると、世は泰平となり、富士信仰登山も一種のレクリエーション的意味を兼ね備えるようになったと言われている。

富士講最盛期は江戸時代後期、文化・文政のころには、お山が開かれている夏の2カ月間に、全国各地から数万の人びとが押し寄せ、裏長屋に住むハツァン、熊サンも先達と呼ばれるリーダーに率いられ「六根^{ろっこん}エー 清浄^{しやうじやう}イー お山は晴天 どうぞ御利益をおあたえください 借金がなくなりますように」と唱えながら登山していった、と言われております。

2. 富士山の文学—その通俗と偉大さ

富士山を「偉大なる通俗」と断じたのは深田久弥さんであった。「日本百名山」で、「あまりにも曲がないので、あの俗物め！と小天才たちは口惜しがるが、結局はその偉大な通俗性に^{かぶと}甲を脱がざるを得ないのである」と、その文章を続けている。

*株式会社ユアテック ソリューション部 プラント関連グループ

考えてみれば、その通俗であり偉大であることが、昔から人びとの創造性を刺激して、万葉集にはじまる膨大な数の文学作品を生むことになったといえよう。

ことに日本人にとって、古来、山は神が宿り、祖先の霊が眠るところとしてあがめられてきた。山を目の前にしたとき、なにかしら胸にぐっとこみあげてくるものをもつのが、この国に住む人びとの心情であり、尊崇の念もあれば親近の念もある。

まして、その最高峰にして八面玲瓏（れいろう）の山姿となれば、文人ばかりでなく、あらゆる芸術家の心をかきたててきたのも当然のことであろう。

3. 日本人の富士山好き

それにしても、日本人は本当に富士山が好きである。遠い神代の昔から、富士は日本人にとって憧れの山であり象徴となる山であった。

標高3,776メートルで日本一の高さ。高いだけでなくまさに“眉目秀麗”という形容がぴったりの美しい山容であり、冬の霧氷を咲かせた富士もすばらしいが、春や秋、紅色に染まった富士も感動そのもの。そして乱れ笠雲やつるし雲を頂いた富士にも捨てがたい魅力を感じるものである。こうして富士山は四季折々、さまざまに姿を変え、日本人を壮大な美の世界へといざなってくれるのである。

それは俗世界にも表れ、最近ではめっきり数を減らしてきた「銭湯」であるが、以前はその壁面にもいっばいに描かれた富士山があったものであるし、また、日本には



(筆者：機内からの撮影)

“富士”や“富士見”の地名が各地に存在する。これらすべてが、「つねに富士山を見ていたい」、「つねに一緒にいたい」との一種の恋焦がれる心情の表れなのではないでしょうか。

さらに、富士山はひとつであるが、日本各地には「ふるさとの富士」と呼ばれる山が各所に存在しており、その数300を超え、標高も数十メートルのものから3,000メートルを超えるものまで千差万別である。

おわりに

前述のとおり、日本人にとって憧れの山であり象徴となる山であって、胸を張って外国人にも自慢できる富士山。また、日本を訪れる外国人もまた、激賞を惜しまない富士山であるが、眺めるのと足元を見るのと大違いの山も富士山である。つまり、ごみの山ゆえ、世界遺産（自然遺産）登録申請しても認められない、との理由か？申請出来ずにあったが、最近「文化遺産」へ変更して申請する方向のニュースを耳にした。

いずれにしても登録されるのは良いことであるが、有史以来の秀麗な姿を後世に残すためには環境問題に真剣に取り組むことが求められているのではないのでしょうか。

- 参考文献
1. 川村匡由「ふるさと富士百名山」（山と溪谷社）
 2. 山本鉦太郎監修『日本の「富士」たち』（講談社）